

文法詳解

土佐日記新釈

元都立三鷹高教諭

秋 末 一 郎 著

加 藤 中 道

秋
末
一
郎
著

詳文
解法

土
佐
日
記
新
釈

加
藤
中
道
館

文法 土佐日記新釈
詳解

検 印

省 略

著 者 秋 末 一 郎

発行者 加 藤 静 雄

発 行 所

加 藤 中 道 館

〒102 東京都千代田区三番町14

電 話 (03) 2 6 1 - 7 6 2 5

振 替 東 京 1 3 7 4 3 4 番

K C - B - B

印刷・宇高印刷 製本・萩原製本

定価はカバーに表示してあります

は し が き

一、本書は主として高校生を対象にして、土佐日記の全文にわたって注解を施した。

一、注解はさきに公にした「土佐日記精解」に筆を加えて、簡潔にして要を得たもの、懇切にして丁寧なものであるようにした。

一、本文は三条西本を底本とし、適宜、諸本を参考にした。また、読者の便を考え、仮名には適当な漢字を充て、句読・濁点を施した。本文を細かく分けたのは著者の私意による。通解は直訳を旨とし、部分的には意識もしたが語釈でその旨ことわってある。通解の中の括弧の部分は訳を補ったものである。語釈・文法は、語句の意をまず掲げ、詳細な説明・文法的解説はその後に添えるようにした。文法は解釈の助けとなるものであるようにしてある。本文の傍注文法解説には、特別のくふうもしてあるから「略号表」を参照されたい。参考は評及び参考となる事からについて書き添えた。巻末に語句索引を添えて検索に便なるようにした。

一、執筆に当っては諸先輩の高説を多く取り入れさせていただいた。

昭和三十四年三月二十二日

著者しるす

解 說

一 書 名

「土佐日記」の名称は、貫之みずから付けたものらしい。今は伝わらないが、貫之自筆の外題に「土左日記」とあったといわれる（定家本奥書）。「佐」は左と同じことである。われわれは「とさにっき」と言っているが、古くは「とさの日記」と呼んだらしい（前田本「惠慶集」）。「日記」も「にき」と称したのである。貫之が土佐守の任を終えて帰京する路次の日記であるから「土佐」の名を冠したものであらうが、「土佐の国からの日記」の意か、「土佐守であった人の日記」の意かはわからない。

二 成 立

貫之が土佐守として任国に下ったのは延長八年（九三〇）で、任を終えて京に帰りのぼったのは承平五年（九三五）二月十六日である。これだけで成立年代を詳かにすることはできないが、旅中のつれづれに、おりにふれて書きとどめておいた草稿を、帰京、まもないころに加筆補正したものである。したがって「承平五年二月十六日を隔たるそう遠くないころ」とだけはいえよう。

三 作 者

序によってわかるごとく、貫之が女性に仮托して書いたものである。天曆五年（九五二）に成った「後撰集」に、日記中の歌が日記とほぼ同じ内容の詞書を添えて貫之の作として載っているから、日記の書かれたところから貫之の作とわかつていたのであらう。それに、貫之自筆の本もあったというから間違はない。

紀氏は遠く有名な武内宿弥から出ている。もとは相当な家柄であった。しかし、藤原氏が勢力を増すにしたがつて、他の菅原・橘などの諸氏と同じ運命をたどり、次第に振わなくなつて、平安時代の始めころは平凡な受領階級にすぎなかった。次の系図によつてわかるように、貫之はその十九代目に当る。父は望行、彼はその長男で

ある。有常の妹、静子は文徳天皇の妃で、惟喬親王これたかの母である。有常が親王のお供をして在原業平らと歌の贈答

武内宿弥……(十代略)……磨
飯磨 古佐美

磨名 ○ ○ ○ 長谷雄 淑望

猿取 ○ 梶長 興道 本道 望行 貫之

有友 友則

名虎 有常 女(平業妻)

女(敏行妻)

静子(文徳帝妃・惟喬親王母)

女(敏行母)

をしていることは「伊勢物語」にみえる。有常のもうひとりの妹は、「古今集」に十八首の歌を残している藤原敏行の母であり、娘は敏行の妻となっている。在原業平の妻も有常の娘である。さらに、同族の長谷雄はせおは漢詩文に秀で、「紀家集」を残し、その子淑望とむは古今集真名序の作者といわれる。貫之の従兄弟友則は古今集の撰者のひとりであり、貫之に匹敵する歌人であった。その父有友も歌人であった。このように、紀氏一族は官職においては言うべきものは得ていなかったが、文化的な面においては、かなりの活躍をしていた人々である。こうした文学的な血統・環境が、貫之をして当代一流の文化人にしたてていったものと思われる。

貫之の生涯については、あまり詳しいことはわかっていない。その生涯は不明であり、没年についても異説がある。香川景樹かがきが「古今集正義」「土佐日記創見」等において、「古今集」の撰進された延喜五年(九〇五)には、約四十五歳であろうとなえ、生年を貞観三年(八六一)ころ、没年を天慶九年(九四六)、八十五歳ぐら

いとして以来、これが有力な説となつてゐる。しかし、定説はない。これによると、「土佐日記」を書いたと思われる承平五年（九三五）には約七十五歳である。しかし、谷馨氏は「紀貫之年齢考」（雑誌「槻の木」）において、「古今集」を撰した當時を二十三、三十二、又は、三十四歳とする古伝の説に注目し、三十四歳説により没年を七十三歳前後とし、生年を逆算して貞観十四年（八七二）前後としておられる。しかし、古伝の説というのもその根拠は明かでない。

さて、貫之の闊歴についてわかつてゐる点について述べよう。貫之の作物に貫之の名の初めて見えるのは、断簡として残つてゐる「寛平御時后宮歌合」である。披講年代については諸説あるが、通説にしたがつて寛平五年（八九三）とすれば、二十一、二のころである。新進気鋭の少壮歌人として歌壇に花々しく登場したころであろう。次いで延喜五年（九〇五）、「古今集」の編纂に参加してゐる。三十三、四歳になつてゐる。撰者の筆頭であつた紀友則の没後はその中心となつたやうで、有名な仮名序を添えて奏上してゐる。当時の官職は御書所預であるから、微官である。延喜六年（九〇六）二月に越前権少掾に任ぜられ、翌年、内膳典膳となつてゐる。この年、九月十日、宇多天皇の大井川行幸に供奉して、そのおりの人々の歌六十三首をまとめて、その序文を書いてゐる。今日はその序と、諸書に散見する四十八首が残つてゐるだけである。微官ながらも、歌人としての地位はかなり築かれていたことがわかる。十年、少内記、十三年、大内記となり、「亭子院歌合」に他の古今の選者と共にその名を連ねてゐる。十七年、従五位下に叙せられ、加賀介に、十八年、美濃介に任ぜられ、京都を離れてゐる。延長元年（九二三）、大監物、七年、右京亮となつてゐる。このころ、宇多法皇から、「古今集」の中でとくにすぐれた歌を選んで奉るやう命をうけたが、その完成を見ない延長八年、土佐守に任ぜられ、京都を去ることとなつた。その任地において、余暇をみて、「古今集」を中心として、弘仁より延長に至る間の秀歌三百六十首を選んで、帰京後、奏進した。しかし、法皇はすでに崩御の後であつた。これが、「新撰和歌」である。そのおりの事情は序に詳しい。これと前後して書かれたのが「土佐日記」である。次いで天慶三年（九四〇）

玄蕃頭に、六年、従五位上、八年、木工権頭に転じ、九年に没した。これが、記録などによって知られる貫之の一生である。

次に、歌人・歌学者としての文化的業績の面について述べよう。まず、古今時代を代表する歌人であり、古今集の撰者及び仮名序の作者として、和歌史・評論史において重要な地位を占めていることは周知のことである。「土佐日記」の作者、つまり仮名の日記の創始者としての業績も高く評価されなければならないが、むしろ、前者において貫之の真価は見出されるのである。古今集は、わが最初の勅撰和歌集であり、初めての試みとして重要な意義を持つ事業であった。その大事業の撰者のひとりとして、微官の貫之が選ばれたということは、歌人としてはいうまでもないこと、撰集という仕事を達成できる手腕と才能を十分認められ、少数の権威者の列に加えられるのであらう。とくに、友則の没後は主宰者として、序文の起草にあずかったということは、貫之において他に適当なる人材のなかったことを証拠だてるものである。これを裏付けるものとして、山田孝雄博士は「紀師匠家曲水宴和歌」(『日本歌学の源流』収載)において、「紀貫之が当時歌道の師匠として仰がれ、その門に入り教を請うた所の集団があったことがあり、而して歌の道といふ語が既に存在し、その歌道というものが公任より前に貫之によって指導せられていたことが知られるのである」と言っておられる。この「曲水宴和歌」は博士の考証によれば、昌泰年中(八九八—九〇〇)、延喜五年(九〇五)以前に行なわれたものであるから、古今集の撰進されるまでに、すでに一部歌壇の師匠として衆人の尊敬を受けていたことが知られる。古今集に百首近い歌が採られ集中随一であるのも貫之の位置を示すものである。こうして彼は永く歌聖のひとりとして後世まで讃仰されることとなった。続く後撰集に七十七、拾遺集に百三、新古今に三十二、新勅撰集以下に百三十ほど採られ、古今に続く、後撰・拾遺には、他を圧して多く採られている。

このように歌人としての貫之は偉大な存在であったが、その作品についてみれば、情熱的なところは全く乏しい。すなわち、当時の歌が概してそうであったように、理智的・技巧的であり、語句を洗練してなだらかな声調

を喜ぶという、形式美を整えることに力が注がれている。したがって感興の乏しい、感銘の少い歌となっている。これは貫之の穩健・冷静・犀利な人柄にもよること、彼は詩人というよりは、むしろ学者肌の、思索型の人であつたようである。正岡子規が「再び歌よみに与ふる書」に「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集」といい、「歌らしき歌は一首も相見え不申候」と言つたのも、この理智的・技巧的な形式美を重んじる欠点となつてゐる面を指摘したものである。

しかし、この穩健・冷静な人柄が撰者としてその責を全うさせたのであろうし、評論史の劈頭を飾る仮名序を残さしめたのであろう。評論家としての見解は、この仮名序、及び新撰和歌序に見える。その詳細は割愛するが、新しい国文学、とくに和歌に理論的な根拠を与えようとしたその功績は、たとえ、漢学の影響を受けたものであるにしても、また、初歩的なものであるにしても、高く評価されなければならない。なお、仮名序は、後世に至るまで歌論のよりどころとされ、その文章は名文として、仮名文の手本となつた。

貫之の作品のうち、和歌は、古今集以下勅撰集に約四百五十首、家集「貫之集」の約七百首の過半、新撰和歌に四十五首、金玉集に八首ほど残つてゐる。その他、主なものを次にあげる。

古今集仮名序 大井川行幸和歌序 新撰和歌序（漢文） 土佐日記 万葉集抄（「八雲御抄」等に見え現存しない）。

四 内容

承平四年（九三四）十二月二十一日、土佐の国守の任を終えて、舟路によって翌五年一月十六日、京の旧宅に帰り着くまでのことを書いてゐる。初めに序文として「男もすなる日記というものを、女もしてみむとするなり」とことわつてあるように、女性の書いたものとしてある。こうした偽装がなぜ必要であつたかについては、古来、いろいろに言われている。香川景樹は、「女もしてといへるに、女ならざること、なほしるし。……かまへて、わざとうらうへをいへる。皆、女の女ならざるを見えしむる、あざれなり」と言つて、すべて貫之の芸術

的な技巧、つまり俳諧であるとしている。岸本由豆流は、日記はもと漢文で記したもので男のすることである。それを仮名で書いたのは「めめしきわざなれば、紀氏みずから書けることを隠して、女の書ける趣にて書かれたるなり」と言っている。加藤美樹は、「愛し子の、病して死したりしを、あかず嘆き惜しまれしが、さすがに人目のめめしきに恥ぢて、女文のさまにして書かれたり」と、「土佐日記解」に紹介されてある。「解」の田中大秀は美樹・由豆流の説を肯定しつつ、「押鮎の口をすふ」「ほやの妻のいずし」などのたわむれや、「海賊にいたくおどたる」こと、また人の上を悪く言った口さがないこともあるから、「ただなだらかに罪をのがれむなどにより」、名を秘して女に仮托したのだと言っている。要するに、女性に仮托したのは、そう深い理由があつてのことではなく、景樹の指摘したように、おもしろく、おかしく、たわむれにというのが本当のところではなからうか。それに、すでに貫之は、古今集の仮名序を書いている。改めて、仮名文を恥じらう必要もあるまい。従来の習わしを破って新しい試みとして仮名の日記を書いてみようという大胆な狙いがあつたのであろう。初めての撰集、初めての仮名序、初めての仮名の日記、絶えず新しいものの創始に努力して来た彼である。そして、五十嵐力博士もいわれるように「後、年を経るままに、至美至高なる上品な倭文に一種の不満を感じて、今度は袴を脱ぎ俗に砕けた、同時に彼の洒脱性を躍如たらしめるに都合のよい下手物文学を」というのがこの「土佐日記」であると考えたい。したがって、女性に仮托しつつ馬脚をあらわして行くのも「かまへたわざ」であらう。随所に見えるユーモアもさることながら、こうしたかくれたユーモアのあつたことを見のがすことはできない。ちょうど土佐からの帰路、旅の苦しみ海賊襲来の不安、亡児を思う悲しみ、帰京の喜びなどが好都合な素材となつて新しい試みを完成させたのであろう。

文章は平易でわかりよい。竹取に多い漢語などもできるだけさけ、国文のやわらかみを、とくに女性の文章らしく見せようと努めているように見受けられる。しかし、次の

この海へにてになひいだせる歌、「惜しと思ふ人やとまると、葦鴨のうちむれてこそ、われは来にけれ」と

言ひてありければ……

かちとりの申して奉る言は、「この幣の散る方にみ舟すみやかに漕がしめ給へ」と申して奉る。

とある「漢文調の和文」といった堅さは、この日記の古いことを示しているが、例の「かまへたわざ」であるとも考えられる。修辭については、それぞれの所で触れておいたが、他書には見られない苦心のあとが見られる。

五 史的地位

仮名文をもって書かれた最初の日記としてその史的意義は深い。後世の日記が日付を記していなかったり、ある間をまとめて書いたりしているのに比べれば、短期間ではあるが、日時の順を追って一日も欠けた所のないのは、古い日記の形式を残しているもので、過渡期の姿をとどめている。こうした文学上の意義ばかりでなく、当時の世相、交通、風俗、民謡、信仰などを知る上にも、また、国語学上からも重要な資料とされている。

六 諸本

貫之自筆本があったといわれるが現存しない。この自筆本を書写したのが前田家に伝わる定家書写本である。土佐日記抄の本文はこれである。今日、複製され刊行されている。定家の子、為家も貫之自筆本を書写し、その転写されたものが青谿書屋本といわれるものである。さらに、貫之自筆本を延徳二年（一四九〇）に松本宗綱が、同じく、明応元年（一四九二）に三条西実隆が書写し、前者は近衛家と宮内庁圖書寮にその転写本を蔵し、後者の転写本が三条西家に伝わる。すなわち、貫之自筆本をもとにしたものが四種あって、いずれも相互に異同があるが、三条西家に伝わるものは誤脱も少く、善本とされている。本書はこれを底本とした。次にこれらを図示すると次のようになる。

七 研究史

土佐日記の研究が盛んになったのは、江戸時代初めころからである。それ以前においても藤原定家などによつて書写が行なわれているが、研究らしいものはない。次に主なものあげよう。

北村 季 吟	土佐日記抄	寛文元年刊
岸 本 由豆流	土佐日記考証	文化十二年成
富士谷御杖	土佐日記燈	文化十四年刊
香川 景 樹	土佐日記創見	文政六年成
田 中 大 秀	土佐日記解	文政十二年成
橘 守 部	土佐日記舟の直路	天保十三年序
鹿 持 雅 澄	土低日記地理弁	安政四年成
橘 純 一	土佐日記	昭和四年大倉広文堂刊
中 村 多 麻	定本土佐日記異本研究並校注	昭和十年岩波書店刊
白田甚五郎	土佐日記の鑑賞	昭和十三年星文館刊
池田 龜 鑑	古典の批判的処置に関する研究	昭和十六年岩波書店刊

貫之自筆本	定家書写本	定 家 本
	為家書写本	青谿書屋藏本
	宗綱書写本	近 衛 本
	智仁親王筆写本	図 書 寮 本
実隆書写本	三条西家藏本	三 条 西 本

山田孝雄
鈴木美知太郎
今泉忠義
荻谷朴
小西甚一
荻谷朴

土佐日記
土佐日記精解
土佐日記（付紀實之全集）
土佐日記詳解
土佐日記新釈

昭和十八年宝文館刊
昭和二十四年文教社刊
昭和二十五年朝日新聞刊
昭和二十六年有精堂刊
昭和三十年要書房刊

傍注文法用語略号表

名	代	四	上二	下二	上一	ナ変	ラ変	カ変	サ変	ア	ハ	ヤ			
名詞	代名詞	四段活用動詞	上二段活用動詞	下二段活用動詞	上一段活用動詞	ナ行変格活用動詞	ラ行変格活用動詞	カ行変格活用動詞	サ行変格活用動詞	ア行の動詞	ハ行の動詞	ヤ行の動詞			
ワ	形	形動	連体	副詞	接続	感	受	可	尊	自	使	打	婉	推	現推
ワ行の動詞	形容詞	形容動詞	連体詞	副詞	接続詞	感動詞	受身の助動詞	可能的助動詞	尊敬の助動詞	自発の助動詞	使役の助動詞	打消の助動詞	婉曲の助動詞	推量の助動詞	現在推量の助動詞
反実	詞	意志の助動詞	当然の助動詞	過去の助動詞	完了の助動詞	断定の助動詞	比況の助動詞	伝聞の助動詞	格助詞	接続助詞	副助詞	係助詞	終助詞（一字の場合）	終	未
反実仮想の助動	終	体	己	命	（尊補）	（謙補）	（音）	（強）	（略）	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑
終止形（用言の下にある場合）	連体形	已然形	命令形	尊敬の補助動詞	謙讓の補助動詞	音便	強意的な用法	省略	係結の關係	（消）結びの消えた係結	（略）結びの省略された係結	未然形	連用形	終	未

目 次

解 説

一 男もすなる日記……………

二 それの年の二十日……………

三 二十二日に、和泉の国までと……………

四 二十三日。八木の康教といふ人……………

五 二十四日。講師、馬のはなむけしに……………

六 二十五日。守の館より……………

七 二十六日。なほ守の館にて……………

八 二十七日。大津より浦戸を……………

九 かく別れがたく言ひて……………

一〇 二十八日。浦戸より……………

一一 二十九日。大湊に泊れり……………

一二 元日、なほ同じ泊なり……………

一三 二日、なお大湊に……………

一四 七日になりぬ……………

一五 かくて、この間に……………

一

二

五

六

八

九

一〇

三

三

三

三

三

四

七

三

一六 ある人の子の童なる……………

一七 八日。さほることありて……………

一八 九日のつとめて……………

一九 これより今は……………

二〇 かくて宇多の松原を……………

二一 かくあるを見つ……………

二二 十日。けふはこの奈半の泊に……………

二三 このはねといふ所……………

二四 十二日。雨降らず……………

二五 十三日の暁に……………

二六 十四日。暁より雨降れば……………

二七 十五日。けふあづき粥煮す……………

二八 十六日。風波やまねば……………

二九 十七日。くもれる雲なくなりて……………

三〇 十八日。なほ同じ所にあり……………

三一 十九日。日あしければ……………

三二 二十一日。卯の時ばかりに……………

三三 かくうたふを聞きつつ……………

三四 かくいひつつ行くに……………

三五 二十二日。よむべの泊より……………

三

三

三

四

四

四

六

六

五

五

五

五

五

六

六

七

七

七

七

七

— 目 次 —

晝	二十三日。日照りて曇りぬ……………	壹
晝	二十六日。まことにやあらむ……………	貳
晝	二十七日。風吹き波荒ければ……………	参
晝	二十八日。夜もすがら……………	四
晝	三十日。雨風吹かず……………	五
晝	二月一日。あしたの間……………	六
晝	二日。雨風やまず……………	七
晝	四日。かちとり……………	八
晝	五日。けふからくして……………	九
晝	けふ波な立ちそ……………	十
晝	かく言ひてながめつつくる間に……………	十一
晝	六日。濡標のもとより……………	十二
晝	七日。けふ川尻に……………	十三
晝	八日。なほ川のぼりに……………	十四
晝	九日。心もとなさに……………	十五
晝	かくのぼる人々の中に……………	十六
晝	十日。さはることありて……………	十七
晝	十二日。山崎に泊れり……………	十八
晝	十六日。けふのようさつ方……………	十九
晝	夜になして京には入らむ……………	二十

晝	家にいたりて……………	二九
晝	さて、池めいて……………	三〇
晝	語句索引……………	三一

一 男もすなる日記

男もすなる日記(に)といふものを、女もしてみむとてするなり。	副 サ変終 伝体	格 四体	格	副 サ変用接上 一未 意終	格 サ変体 断終
--------------------------------	----------------	---------	---	------------------------	----------------

【要旨】 男性の書く日記を女性が書くのである。

【通解】 男もすると聞いている日記というものを、女(の私)もしてみようと思つて書くのである。

【語釈・文法】 ○男もすなる―男もすると聞いている。男もするといわれている。「も」は並列を示すが、ここは「も」でなければならぬということもない。主語を示す「の」でじゅうぶんである。「す」は終止形で、終止形(ラ変・形容詞・形容動詞には連体形)に続く「なり」は推定・伝聞を示す。しかし、連体形に続く場合の「なり」は断定を示す。下の「してみむとてするなり」はこれである。○日記―古くはニキと読んだ。○してみむとて―「みむ」、は今日の……シテミョウの意で、「みる」に見ルの意はない。こうした「みる」の用法は平安初期には少いといわれる。したがって古文の「……みる」は、一応、目デ見ルの意に訳してみるのがよい。「とて」は格助詞「と」に接続助詞「て」の添わった一格助詞とみなす。

【参考】 この一文によって、この日記が女性の作であるように偽装されていることを知る。この偽装については解説を参照されたい。もっとも、人によっては額面どおり貫之近侍の女性の作とする人もある。とにかく、問題を含む一文である。